土車（つちぐるま）

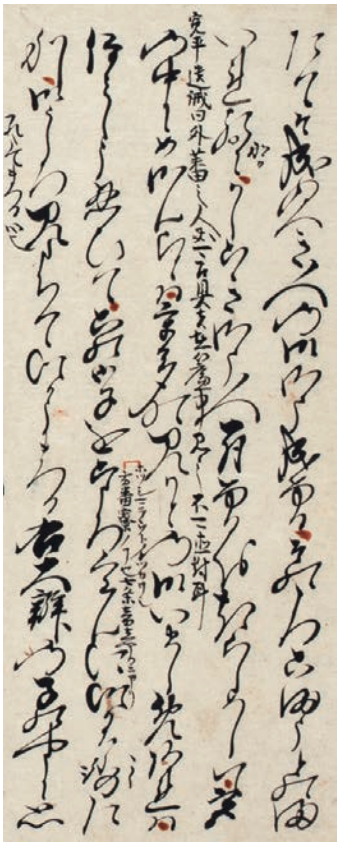
第　148　号

—令和５年９月20日発行—

公益財団法人　古代学協会だより

『源氏物語』に見える『寛平御遺誡』

大島本源氏物語（古代学協会所蔵）の桐壺より



桐壺更衣は帝の寵愛を受けて皇子を産んだが、皇子三歳の年はかなく世を去った。五年ほど時が流れた。桐壺帝は入朝している高麗人の中に優秀な相人がいると聞き、学者出身の右大弁に皇子を汝の子と装って観相を受けさせよと命じ、使節一行が滞在している七条の鴻臚館に連れて行かせた。相人の言は「帝王となる相をお持ちですが、国が乱れ、人々に憂いをもたらすかもしれません。天子を補佐する役目を担う人として見てみますと、その相とも合わないようです」というものだった。皇子は朝廷を支える道に進むべきだ、と帝は得心し、親王ではなく源氏とすることを決める。皆さん御存知の光源氏である。

帝は相人から直接話を聞きたかったであろうが、「宮の中にめさんことは宇多のみかとの御いましめあれば」という理由で、皇子を鴻臚館に遣わしたのであった。この段は宇多天皇が譲位（寛平九年［八九七］七月三日）に当たって醍醐天皇に与えた『寛平御遺誡』中の一文「外蕃の人、必ず召し見るべくんば、簾中に在りて見よ。直ちに対ふべからざるのみ。李環に、朕すでにあやまてり。新君慎め」（原漢文）を下敷きとしている。李環については、寛平八年三月四日に召されて入京した唐人梨懐との関係が指摘されている。

この一文は、『寛平御遺誡』の名で伝来する本に記されているが、『源氏物語奥入』（藤原定家作）その他の『源氏物語』註釈書の中にも見えている。大島本源氏物語（全五十三冊。「浮舟」を欠く）は、公家の飛鳥井雅康が周防・長門の守護大内政弘から所望されて書写した由緒を持つ（「関屋」の文明十三年［一四八一］九月十八日書写奥書）。当初の「桐壺」は『源氏物語』本文の後ろに定家『奥入』の「寛平遺誡　外蕃之人…」の文を持っていたであろうが、今の大島本「桐壺」は永禄七年（一五六四）に聖護院の大門跡道増が長門滞在中に書写した本（吉見正頼［石見の武将］の永禄七年七月八日識語。「夢浮橋」は道増に同行した新門跡道澄が書写）であるためか、『奥入』を持たない。しかし、本文の「宮の中に…」の箇所には、「寛平遺誡曰」として「外蕃之人」の一文が「不可直対耳」まで記載されている。正頼以後の所蔵者が註釈書類を学びつつ書き入れたのであろう。

古藤　真平　（研究員）

牧野富太郎博士を教育文化史の立場から再評価

びわこ学院大学短期大学部教授　光川 康雄

私は長年にわたって細々と「聖徳太子」信仰の研究を続けてきました。きっかけは、梅原猛氏の『隠された十字架　法隆寺論』（新潮社）でした。大学での専攻は、教育学でした。それが専門の講義以上に、文化史学（日本史）や国文学の講義に熱中しました。ところが、三年時の転専攻に失敗。教育学の範囲を勝手に拡大解釈して、「飛鳥白鳳期の学問に関する一考察」と題する卒業論文に仕上げました。（のちに第一章の一部を大幅に改訂増補して「聖徳太子の学問に関する一視点　―太子信仰と道教思想を中心に―」と題して『パイデイア』22（同志社大学教育学会）に掲載。）その後、五年間の社会人生活を経て、大学院（文学研究科文化史学専攻）に戻ってきたわけです。修士論文は、「『聖徳太子伝暦』考　―来歴・典拠・編年―」（のちに『日本書紀研究第16冊』、『文化史学』42、『文化学年報』45に、それぞれ「『聖徳太子伝暦』編年考」、「平安時代成立の諸書所引「聖徳太子伝」と『聖徳太子伝暦』」、「『聖徳太子伝暦』典拠の整理」などとして掲載。）という題名で、平安時代成立の太子信仰の集大成の書が題材になりました。このような研究をおこなっていた私に転機が訪れました。

二〇一二年四月に刊行された沖田行司編著の『人物で見る日本の教育』（ミネルヴァ書房）です。

同書に、「牧野富太郎」を取り上げて執筆したとき、日本教育史で彼を評価した最初の論考だと思っていました。教育史的には珍しい人物を紹介しましたねというお言葉もいただきました。時代も経歴も未知の人物を扱うことは調査の段階から困難をきわめましたが、報われた気持ちを味わいました。古くからの友人からは、同姓同名の別人かと思われました。それまでの私は、「聖徳太子」一辺倒で、学生からも「聖徳太子の先生」と呼ばれるほどでした。

ところが、一九九九年四月に発行されていた新谷恭明・土戸敏彦編著『人間形成の基礎と展開』（コレール社）において、新谷氏が取り上げられていたことをご本人からご著書の送付と共に、お知らせいただいたのです。著名な日本教育史の大家の論を知らなかったことはあまりにもうかつなことでした。

それは、氏執筆の第六章「学校幻想の成立」の中で「牧野富太郎の夢」「牧野富太郎の損得」という見出しをつけて、牧野の小学校中退の理由などに関して教育史的に明快に分析され論じられています。

筆者は、旧稿では彼の蔵書の多さと社会教育に注目して牧野の植物見学会などの主催や援助などに論を進めました。その際、子ども好きの牧野の一面など、論じつくせなかった点もありました。そして、昨年旧知の編集者から、牧野富太郎の単著を書かないかとお誘いをもらったのです。そして、約一年がかりで書き上げたのが『牧野富太郎　草木を愛した博士のドラマ』（日本能率協会マネジメントセンター、三月五日発行）です。

はしがき、第一章「牧野富太郎の生涯」条、第二章「牧野富太郎をとりまく人々」、第三章「牧野富太郎の足跡案内」、おわりに、参考文献、牧野富太郎略年表という盛りだくさんの内容になっています。幸い、表紙などのかわいいイラスト、豊富な写真や地図などもあり、おかげさまで六月現在で三版を重ねています。前回のような専門論文ではなく、牧野富太郎とその家族や友人たちを分かりやすく解説することに努めました。関係人物では五三人を紹介し、牧野のゆかりの人として江戸時代のシーボルト・小野蘭山から板垣退助・福沢諭吉・杉浦重剛など明治時代に活躍した著名人までも説明をつけました。最も苦労した章です。紙幅の関係で省略せざる負えなくなった人物もいます。さすがに、坂本龍馬は考えませんでしたが、中浜万次郎などは候補のうちの一人でした。

牧野ゆかりの地などをあらためて訪問し、関係資料の再確認もおこないました。彼の学識の背景にある近世儒学や洋学の「学び」の姿勢と努力。さらには膨大な量の蔵書から推察される読書量など、牧野富太郎の学識の深さや学びの姿勢から私は大きな刺激を受け続けたことも記しました。その結果、数多くの類書のなかでも、日本教育文化史研究の専門家としての個性は打ち出せたように自負しています。広くご高覧いただけると幸いです。

著書にはふれられなかった点をいま少し。それは、牧野が東京大学で冷遇されたことと彼の膨大な量の標本（牧野は「標品」と呼んでいました。それだけ重要視していたということでしょうか。）が東大でなく東京都立大学で保管整理されたというところです。まずは一八九三年帝国大学の助手を拝命し一九一二年にようやく講師に昇格。以後その地位のまま一九三九年に退職するまでの約五五年です。さらに、講師に昇格しても「植物分類学野外実習」という講義を担当したのは十年あまり後のことになったと記録されています。

彼の植物知識は幅広く、特に名称の由来など故事を交えたり、笑い話に例えたりして印象づけたといわれています。各地で行われた植物会では、老若男女に気軽に対応していたという証言が数多く伝えられています。社会教育活動の場での牧野の功績は彼の幅広い行動範囲からもが推察されています。また、採集に参加した子どもたちの発言などには、もう少し注目されても良いと思います。さらに、牧野の本の収集に関して、一つ気がついたことがあります。彼は同じ文献でも改訂や増補されるたびに買い揃えたと伝えられますが、納得できる点が多いと考えます。といいますのも、十年以上前までの図書館の蔵書にはカバーや帯などが外されたものしか無かったと記憶しています。また、付録の「月報」などの資料も不揃いでした。正確さを期する立場からは許せないことではないでしょうか。いろいろ教えられることがありました。

一方、長く神戸の資産家・池長孟氏に預けられていた牧野の標本が、東京都に寄贈された不思議です。東大退職時のいざこざが尾を引いているとも考えられますが、東京大学植物学教室での彼への評価がきわめて低いことにも起因していると推察できるのではないでしょうか。東大では無視されているに近いと思います。『東京大学史』の記述や『東京大学総合研究博物館』の所蔵品などからもうかがえます。

京都と牧野とのエピソードをこの原稿執筆のために博捜したのですが、残念ながら見つけられませんでした。大阪府や兵庫県と比べると、京都府に十八回（明治時代に三回、大正時代に五回、昭和時代に十回）は植物採集などの形で訪れて調査しているだけに、今後にゆだねておきたいと考えます。高知新聞社の資料によれば、「昭和七（一九三二）年四月、富太郎は旧知の田代善太郎と春らんまんの京都を楽しんだ。四月十一日には修学院離宮と桂離宮を訪ねている。」と記されています。この時、牧野は七十歳でした。大阪府（大阪植物同志会があり、それへの参加など）や兵庫県（後述する池長が神戸在住であり、池長植物研究所が大正七年に設置されそこへの訪問が多い）にはともに二四回も訪問しているのに比べてやや少ないことに気づきました。逆に和歌山県六回、奈良県七回と比較すると多いともいえるでしょうか。わずかに、富太郎が若いころにむさぼり読んだ『本草綱目啓蒙』の著者：小野蘭山が京都生まれということくらいでしょうか。とはいえ、京都帝国大学との関りならひとつ著名なものがあります。『大阪朝日新聞』で牧野富太郎の経済的窮乏記事を読んで、支援の手を差し伸べたのは、京都帝国大学法学部の学生だった池長孟（前述）です。彼の尽力で牧野の貴重な標本が海外流出の危機を免れたといえましょう。

兵庫県の城崎出身の三宅騏一は、同志社ハリス理科学校を卒業後、東京帝国大学理科大学に進学して植物細胞学を修めました。晩年の牧野の植物図鑑改訂について協力を惜しまなかったと伝えられています。このような牧野の周辺の学者たちの業績にも目を向けていきたいと感じています。

さて、牧野夫人・壽衛さんの母親が京都出身であると、牧野の『自叙伝』には記されていますが詳細は不明です。一方、夫人の父親は彦根藩井伊家の武士でした。

その滋賀県には京都と同じく十回訪れていますが、こちらは「イブキスミレ」の発見などエピソードもあります。また東京大学での牧野の庇護者の一人、杉浦重剛は、近江の膳所藩の出身です。

出身地の高知と、成人後の居住地の東京だけが注目されていますが、牧野の活躍は広く全国（一部は植民地時代の台湾や、中国東北部にも）に採集旅行に出かけているのです。それぞれの地域での牧野の足跡も調査が進んでいるようです。実際にNHKテレビドラマの影響で、各地で牧野博士関係の展示や催し物も開かれたようです。私も神戸市兵庫区の「池長植物研究所と牧野富太郎博士」という展覧会を拝見しました。一過性のものでなく、今後も時に応じて継続して取り上げていただきたいものです。

最後に、拙著をご紹介いただいた『京都新聞』（三月十八日の滋賀版および京都新聞ウェブ版）ほか三紙、さらに出演したテレビ『おうみ630』（五月二五日放送）の「しがばな」コーナーなどでも強調させていただきましたが、牧野の「雑草という草は無い」という言葉をかみしめたとき、筆者には「君の名前は何ですか？」という人間同士相互の個性や人格を尊重した社会の実現に向けての心を一層強く抱き、今後とも努力を重ねていきたいと考える次第です。

NHK テレビ出演時
アナウンサー・山下美咲さんとともに

藍寧舎抄
―金田あおいの残したもの―

奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長
同遺跡・調査技術研究室長
金田　明大

愉快な人でした。彼女と出会った人は多くが笑顔になって帰りました。今は幽冥境を異にするそんな仲間であり、ライバルであり、大切な伴侶であった人についてお話をいたしましょう。

彼女は鹿児島県の生まれ、教師だった御両親の転勤で屋久島はじめ鹿児島県内各地にて育ち、家族の影響で歴史に興味を持ったそうです。中国の歴史を学びたいと鹿児島大学に進学するも希望していた先生が退官されていて、どうしようかと受講した考古学の授業が面白く、専攻を考古学にしたとのことでした。

大学院に進学し、奈良に。発掘調査でも器用に仕事をこなす印象がありました。しかし、体質的に屋外での長時間の作業ができなくなり、発掘調査を伴う文化財保護関連の職を断念したのでした。

それでも文化財、特に考古学に関わる仕事をしたいという思いは強かったようです。専攻したものの、文化財に関わるのを断念するような後輩達に異なる選択肢を共有したい、と、好きだった絵やデザインを通じて人々と文化財を繋ぐ活動を構想し、大学院を修了後、デザインの専門学校で学びました。その成果を試しに出展したクラフトフェアで、考古学に強い興味を持つ奈良のデザイナーさんにも出会い、多くのことを学んだようです。また結婚した私の両親がデザイナーであったことも影響したかと思います。

彼女の基本的な思いは、研究と社会を、研究者と文化財に興味を持ってくださる方の間を、研究成果を反映した形で繋ぎたい、というものでした。そこに、考古学を専攻し、またデザインを学んだ自らの存在意義を感じているようでした。また、それぞれの地域に生きた先人達が残したものを通して、地域の人々が繋いできた歴史を今や未来に生きる人達にデザインを通じて伝えたいと口にしていました。

このため、地域を無視した形態だけの模倣によるデザインやグッズについては、妥協できなかったようです。地域に存在した資料を基に、デザインをしていく。それぞれの地域で、多様な生き方をしてきた先人の営みとそれが今に繋がっていることに敬意を示し、伝えることに注力していました。例えば、いわゆる「踊る埴輪（埴輪 踊る人々：東京国立博物館蔵。埼玉県熊谷市野原古墳出土）」が埴輪の代表として各地で使用されるのは、埴輪がない地域ではともかく、素晴らしい埴輪が出土している地域で使われてしまうのは、地域の歴史を尊重していないようで残念だと常に言っていました。探せば目的に合った資料は地域ごとに見つけられることも多い、それが無ければ別のコンセプトを考える、というのがスタイルでした。

当初は博物館の図録などの作成やデザインをおこなっていましたが、徐々に博物館や資料館のグッズ製作、ワークショップなどにも活動を広げていきました。二〇〇八年頃からは依頼グッズのデザイン・制作を開始し、二〇〇九年に個人事業として時代意匠考案　藍寧舎を立ち上げて本格的に活動を開始しました。

当時は直接博物館や資料館での販売と、ハンドメイド関連の催し物への参加が中心でしたが、声をかけて頂いて、仲間と奈良市に「旅とくらしの玉手箱　フルコト」を開店。個性的な仲間、奈良にこだわった独特な品揃えと細い路地の奥にある店舗でなかなかたどり着けない、という珍しさが話題を呼びました。

この頃より、紙によるグッズの製作、書籍のデザインに加えて服飾デザインを学んだ成果による服や布製のグッズに展開しました。

その中のいくつかをご紹介しましょう。

1　古墳鍋つかみ：はじめに人気を博したのはこの商品だったと思います。前方後円墳の形状を模した形態の鍋つかみで、上部には段築を表現したステッチが施されています。このステッチは、宇宙椅子さんの人気商品「古墳クッション」の改良時にも採用されました。鍋つかみ部分を開くと縞の生地があらわれ、古墳の構築土をイメージしています。個人事業開始前から人気の商品で、注文待ちが出るほどに。家の中が製作中の鍋つかみだらけになったこともありました。

2　一筆箋：厚手のトレーシングペーパーと上質紙を組み合わせた一筆箋。歴史を透かして眺める、というテーマは彼女の生涯のテーマでした。一枚で用が済んでも便箋は白紙一枚を付けて手紙を送る、という慣

習を大切に、折角二枚送るのであれば楽しめるものにしたいという発想。組み合わせて重層化した歴史や社会を表現したものでした。

3　スコップスプーン：イベントで出した古墳をかたどったカレーや、奈良県奈良市の petit marche & ぷちまるカフェさんの古墳ケーキをはじめ、食事の時にも発掘感覚で楽しんでいただければ、と探し当てたスコップスプーン。新潟県燕市の製作工房武田さんの製品に台紙を付けて売り出したところ、反響が大きく、手軽に購入できる金額で実用性も高いのでお土産の人気商品に。

4　古墳風呂敷：大和と摂河泉の二種類。スケールを合わせた当該地の古墳のイラストを合わせるとともに、外周には古墳時代前・中・後・終末期の各期を代表する文様をあしらっています。大きさにもこだわりが。近年減っているとは思いますが、大学等の発掘現場へのお土産の代表、一升瓶を包んで持ち運ぶことが可能なサイズにしています。

5　こぷん：誰でも簡単に美味しいものを楽しく作って食べることができたら、という思いで製作した前方後円墳の形状をしたカップ。主にデザートの型としての使用を想定していました。外してお皿に置いたときに垂れ下がるのを想定し、ゼリー、ババロア、プリンの素で実験を繰り返して型を設計し、試験結果は私や子供のお腹に。高さを強調しすぎにも感じる形状は、引力で格好のいい形になる…つもりのようですが、さて。食品用プラスチックを用いて衛生上の問題にも対応したこの型は、喫茶店や菓子店の方も使用いただき、人気を頂いていたようです。

　また、様々なイベントもおこなってきました。

1　カフェ・飲み会：フルコトの時には、カフェや飲み会などのイベントも精力的におこなっていました。簡便に着られる服装を製作して参加者に古代の人になりきって頂き歴史人物の名を冠したお酒や歴史にちなむ食材や復元食器などを用いて、多くの方に楽しんでいただけたかと思います。

2　人面墨書土器ワークショップ：野焼きした復元土器に、復元円面硯で墨を擦り、参加者が自由な顔を書くワークショップ。ただ描くだけでなく、その前に資料を使って昔の人達の表現や地域による差異を説明しつつ、自由に描いてもらう形に。子供達の自由な発想にはっとすることもありました。

3　木簡ワークショップ：奈良は墨で著名にもかかわらず、自分の子供達が授業でプラスチック製の硯を用いていて、墨を擦ることが禁止されていることに衝撃を受けてのワークショップ。復元した須恵器硯で墨を擦り、木簡に文字や絵をしるすものでした。墨を擦ったことのない子供が多いことに驚きました。

4　遺跡の土でベンガラ染め：遺跡の調査現場でよく見かけるパイプ状ベンガラを利用してその土地の色を表現したい、と挑んだ活動。前処理に薬剤を使用せず、豆乳で前処理するので子供達と一緒にできるのが利点です。調査でよくみられるものですが、なかなか理解を得られず、協力していただいた鳥取県青谷上寺地遺跡のベンガラや、新潟県津南町なじょもんの協力で採取したベンガラを用いて試行錯誤していました。

　まだまだ多様な活動をしていましたが、皆上手くいった訳でもありません。グッズにしても、コピー品の出現など、困難にも直面してきました。グッズや活動が話題になるに合わせて著作権や意匠権等でのトラブルがあり、平素その保護を声高に主張する研究者や活動者がそれを平気で破るなど、残念なことが続き、彼女の心身共に大きく疲弊させていき、突然の別れとなりました。今世の活動はここで終わってしまいましたが、多くの仲間が活躍されているのをどこかで見守っているのだと思います。

木簡研究のおもしろさ（1）

龍谷大学特任教授　角谷　常子

木簡研究の面白さを、とのご依頼をいただいたので、これまで「へえ～」とか「なるほどお」と思ったささやかな感動をご紹介できればと思っている。

私が中国簡牘（中国では竹簡が多数用いられていることから「木簡」ではなく「簡牘」という語が一般的である。近年は日本の影響もあってか木簡ということもある。拙文では厳密な使い分けなく、適宜木簡や簡牘という語を用いている。）と本格的に向き合うようになったのは大学院生の時。それ以来約四十年のお付き合いである。中国簡牘は敦煌及び居延といった西北の乾燥地帯にあった軍事拠点で発掘された木簡から、その研究が始まった。その後、長沙や里耶など内地におかれた縣の役所の井戸から大量に出土したり、墓から盗掘された簡牘を研究機関が買い戻すなどして、数も内容も格段に豊富になり、時代の幅も広がった。中でも戦国、秦、漢、三国、西晋とほぼ通時代的に簡牘が出土している湖南省が、今や研究拠点の一つとなっている。こうした膨大な簡牘資料群は、新たな研究テーマや、さまざまな問題の解決のヒントを埋蔵した、まさに宝の山である。その鉱脈を探り当て、うまく掘り出せるかどうかは研究者の力量次第、なのである。中国はもちろん日本でもいくつかの研究班が組織され、その解読が進められている。また雑誌や書籍という従来からある媒体に加え、ＷＥＢ上で論文を発表したり学術交流を行うサイトも増え、日々データが更新されている。簡牘の点数とそれに伴う研究成果の量的増加と時間的加速に、私は溺れそう、いや溺れている状況である。

本来ならばこのような木簡研究の最前線を踏まえておもしろい発見をお届けできればよいのかもしれないが、とうてい私の能力の及ぶところではない。ここでご紹介するのは、私がこれまで研究した範囲、即ち秦から後漢に至る、行政関係簡牘について感じたおもしろさ、に限定されることをご了解いただきたい。

簡牘の研究は、大きく内容研究と形態研究に分けられよう。内容研究とは、簡牘に書いてある内容についての研究である。簡牘の記載内容は多岐にわたるため、研究テーマも、官制、行政、法制、徭役、兵役、税制、戸籍、家族、交通、商業など、思いつくままに並べただけでも実にさまざまである。中でも法制史研究は、戦国秦、統一秦、漢初及び前漢前半期と、時期的にも数量的にも充実した資料群をもつこともあって、研究がさかんな分野の一つである。一方形態研究とは、簡牘の姿形を対象にするもので、書式研究もここに入る。もちろん内容と形態は相互に関連しているので、両者は没交渉的に成立するものではない。

内容研究のテーマは多様だと述べたけれども、それらのテーマは、簡牘出現以前から文献史料を用いて研究されていたものも少なくない。簡牘の出現で研究が大きく進展するテーマもあればほとんど影響のないテーマもある。歴史史料として、簡牘と文献とはどこが違い、どんな特徴があるのか、はじめにその史料的性格についておさえておきたい。

まず一つは、それらが反映する行政機関のレベルである。『史記』や『漢書』など正史を始めとする文献史料が扱う対象は主に中央レベル、地方では郡レベルである（古代中国は郡県制が基本で、郡の下に県が設置される）。従って登場人物も中央では皇帝や大臣などの高級官僚、地方では郡の長官たる太守とその属僚、あるいは豪族などが中心である。それに対して、墓中出土でない簡牘、即ち西北漢簡、長沙走馬楼漢簡・呉簡、五一広場東漢簡や里耶秦簡が出土したのは全て県レベルの行政機関の遺構なのである。従って簡牘は、文献ではよくわからなかった県の行政のありさまを提供してくれる史料なのである。

もう一つの特色は、簡牘からは日常がわかることである。そもそも文献史料は、個人的な著作から正史のような王朝史に至るまで、全て何らかの目的や価値観に基づいて書かれた著作である。従って、その目的や価値観を基準に、記述に値する事件やエピソードが記されるのであって、ありふれた日常は、ストーリーの小道具として必要な場合以外に取り上げられることはない。文献史料から日常を知るのは難しいのである。それに対して簡牘に記されているのは、平凡な日常生活、毎日の業務の中で生み出された帳簿や文書、あるいは、私的な書信である。当然ながらそこには主義主張も特別な価値基準もない。簡牘の主人公はみな名もなき下級役人や戍卒や客民や市井の人々であり、そんな彼らの日常を、我々は役人の成績記録、食料の支給記録、病欠届けや忌引き願い、借金取り立て願い、中央の視察に備えた備品チェック命令など、さまざまな帳簿や文書を通して知ることができるのである。

要するに、文献史料が、特定の目的や価値観によって著述され、後世そこに何らかの価値が認められたがゆえに今日まで残ったものであるのに対して、簡牘は特定の目的や価値観による選別なく、たまたま残った日常の記録というのが、その根本的な違いであろう。

かように特定のフィルターを通らずに残ったものだからこそ、我々が文献による研究から構築してきた歴史像とは食い違う、あるいは矛盾するような内容に出会うこともある。例えば私の場合、それは一九七五年に発掘された湖北省雲夢睡虎地の十一號秦墓出土の、いわゆる雲夢秦簡の中にあった。この墓は下級官吏の墓と考えられ、副葬品として法律関係の文書が多数入れられていた。秦の法は苛酷だと『史記』には書かれているが、肝心の法が残っていないので果たしてどんな法で、ほんとうに苛酷なのかはわからなかった。しかし、ついに秦の法が出現した！と大きな注目を集めたのである。その中に「爲吏之道」と名付けられた五一枚の竹簡がある。これは役人の心得を説いたものなのだが、そこに「爲人父則茲（慈）、爲人子則孝…、父茲（慈）、子孝、政之本殿（也）」という文章があったのである。これを見た時、「秦は法家、漢初は黄老、武帝以降は儒家思想」という、これまで習った図式とのギャップにすっかり混乱してしまった。秦なのに儒家思想を説いているではないか！と。実際、中国でも「爲吏之道」は儒家思想だとかいや法家思想に儒・道を交えたものだとか、いろいろ議論があった。雲夢秦簡の発表からしばらくたってからも、儒教的徳目を奨励していることを問題にしている研究者はいた。混乱したのは私だけではなかったようである。

漢代軍事機関の装備点検報告書
（中央研究院歴史語源研究所 web サイトより転載）

仲間を探すのはさておき、とにかく私は混乱した。ただ、よく考えてみると、確かに教科書にも秦は法家思想だとは書いてあったが、だからといって孝を否定したとか、慈の心が不要と考えたなどと習った覚えはないし、そもそも常識的にあり得ない。一方、儒家思想にしても、親には孝、子には慈というのは、孔子が言い始めたことではあるまい。孔子よりはるか以前からそんな倫理観はあったはずで、決して儒教の専売ではないだろう。孝や慈という語があるからといって、儒家思想に直結させる方がおかしいのだ。しかしながら私はこの文章を読んで初めてそんな当たり前なことに気付いたのである。秦は法家、漢は儒家、しかも法家と儒家は対立関係、ということから法家は孝や慈を奨励するはずがないと、勝手に思い込んでいたのである。「爲吏之道」は、自分の短絡的な思考に気づき、また儒教とは何かを考えるきっかけを与えてくれた一文であった。

もう一つ、これは多くの人が驚きと戸惑いをもって見たであろう、嶽麓書院藏秦簡にみえる始皇帝の制詔である。「自吾以天下已并、親撫晦（海）内、南至蒼梧、凌涉洞庭之水「、登相（湘）山・屏山、其樹木野美、望駱翠山以南樹木□見亦美、其皆禁勿伐。」（〔伍〕第一組〇五六～〇五八）（大意：統一後、天下を巡行し、南は蒼梧郡に至り、洞庭湖を渉り、湘山・屏山に登った。その木々は自然の美を湛えている。駱翠山以南を望むと、樹木が…また美しい。みな伐採を禁止せよ。）内容は始皇帝が湘山に登ってその自然の美しさに感動し、樹木の伐採を禁ずるよう命じたというものである。自然の美に接した素直な感動とそんな自然を守ろうとする気持ちが感じ取れるであろう。しかし「驚きと戸惑い」といったのは、『史記』秦始皇本紀に、「浮江、至湘山祠。逢大風、幾不得渡。上問博士曰、湘君何神。博士對曰、聞之、堯女、舜之妻、而葬此。於是始皇大怒、使刑徒三千人皆伐湘山樹、赭其山。」（『史記』秦始皇本紀）（大意：長江を渡り、湘山祠に至ったところで大風に逢い、渡れそうになかった。博士がいうには、ここには堯の娘で舜の妻が葬られているとのこと。始皇帝は大そう怒って刑徒三千人に湘山の木を切らせ、はげ山にしてしまった。）という、始皇帝の蛮行として有名な湘山はげ山事件の記述があるからである。

この二つの話、とても同一人物の所業とは思えないが、心理学的にはありうるのだろうか。是非専門家の意見を聞きたいと思う。両者ともに事実を記しているならば、あまりに違う二つの行為をどう整合的に説明するか、困惑してしまうのである。仮にどちらかを捏造と考えた場合、そもそも嶽麓書院蔵秦簡は墓に副葬されていた法令集の如きものなので、捏造はありえない。だとすると

必然的に『史記』が何らかの情報操作をしたことになろうが、ではそれは一体何のためだろうか。あの始皇帝が自然愛護精神にあふれた人だった、といわんばかりの制詔をどう理解するのか、今後、議論される簡だと思う。

我々が見ている秦漢時代の文献はある意図をもって著述され、それが何らかの価値を認められたからこそ二千年を生き残った強者である。その一方で、淘汰された文献はどれほどあったのだろう。たとえ詔書であろうとも正史にとどめられるのは一部である。いわんや日々行き交う文書・帳簿をや、である。生き残った強力な文献たちを相手に研究している我々の前に、日常の業務や生活の中で生み出された帳簿・文書・書籍・法令・手紙たちが、「こんなのありましたけど…」と、ひょっこり現れる。そして我々が文献から構築した世界の大枠の内部を豊かに埋めてくれたり、そもそも文献には見られない新たな事実を提供してくれたり、時にはこれまでの認識と食い違ったもので我々を当惑させたりと、さまざまな刺激を与えてくれる。そうした簡牘と文献との対話の中で、また新しい歴史像が構築されてゆくのである。

（次号に続く）

歴史散策

▽二〇二三年度歴史散策「山科（山階）野を歩く」

五月十六日（火）今年度の歴史散策を開催しました。

好天に恵まれ、新緑の美しい季節に、山科盆地の北端・山科を山科疏水に沿って歩き、古代～平安時代～近世まで、京の都と山科の歴史の深いつながりに想いを馳せる内容となりました。講師は、山中章先生（三重大学名誉教授、古代学協会客員研究員）、清水みき先生（古代学協会客員研究員）。

十三時山科駅を出発し、まずは山中講師の説明を受けながら山科駅前通りと旧三条街道との交差点「旧東海道駒札」へ。この地を東西に貫く街道は、古代から都と東国を結ぶ日本の大動脈であったことなどお話しいただきました。また山科駅前再開発工事の中で発見された平安時代のものと見られる木槨墓から、藤原順子ゆかりの女性の墓と推測されている安朱古墓跡を巡りました。

安祥寺観音堂内で清水講師のお話に耳を傾ける参加者

次に北に歩をむけて、順子によって建立された安祥寺を特別拝観させていただきました。観音堂内にて、ご住職・藤田瞬央様にお寺の沿革を伺い、時勢や災害に翻弄されながらも、今に法灯を繋いでこられた歴代ご住職のご苦労をしのびました。清水講師からは『伊勢物語』七七段・七八段に登場する安祥寺の場面についてお話しをうかがいました。改めて美しい榧木一木造りの十一面観音菩薩立像（奈良時代・重要文化財）、また廃寺状態にあった安祥寺復興を命じた徳川家康坐像にお参りし、境内の地蔵堂、大師堂も拝観しました。

山科疏水と新緑風景

その後、疏水に沿って新緑を楽しみつつ、天智天皇陵へ。最後に御陵入口脇の日時計碑を見学し、解散となりました。山科にお住まいの参加者もおられましたが、「これまで史跡の存在は知っていても新たに詳しく学べて有意義でした」とのお声をいただきました。皆様元気で完歩され、山科野を楽しんでくださった様子で主催者としても嬉しく思います。参加者三三名。

随行スタッフ：竹内千津・山﨑千春

発行者　公益財団法人　古代学協会
604-8131
京都市中京区三条通高倉西入ル
菱屋町四八
電話〇七五-二五二-三〇〇〇
発行日　令和五年九月二十日
印　刷　明文舎印刷株式会社